27　10版　2010年(平成22年)11月3日　水曜日　朝日新聞　第3種郵便物認可

第2回「自由都市・堺 平和貢献賞」 思いやりを世界へ

堺市がアジア・太平洋地域を拠点に国際平和や人権尊重の活動に取り組む個人・団体を顕彰する第２回「自由都市・堺　平和貢献賞」（朝日新聞社後援）の授賞式が10月28日、堺市内で開かれた。大賞に選ばれた社会福祉法人「こころの家族」理事長の田内基（韓国名・尹基）さんは「思いやりの心を広げれば、市民レベルの国際貢献ができる」と訴えた。（室矢英樹、多知川節子）

在日高齢者 誇り持てる社会を

「こころの家族」理事長 田内基（韓国名・尹基）さん

私は韓国人の父と日本人の母の間に、韓国で生まれました。子どものころ、孤児院「木浦共生園」を運営していた母をたいへん恨んですごしました。「なぜ、あなたは日本人なの」と。そうでなければいじめに遭わないのに。帰ると、私は孤児でないのに、寝るのも食べるのもずっと孤児と一緒でした。自分の子が見えないのかと思いました。

大きくなり、私が社会福祉を学ぶと言うと、母は泣きながら反対しました。この仕事は私とお父さんでいいと。福祉は未完成事業のように終わりがないんだと。しかし、また、母を嫌う気持ちがあったから、あなたの言う通りにはしないと福祉を学んだ。

運命というのは不思議です。児童福祉では、なぜ問題行動を起こす子どもがいるのかを学ぶ。私は幼いころ、母によくいたずらをしました。母の愛を独占したいとメッセージを送っていたことに気づき、孤児の寂しさも分かるようになりました。

日韓が国交回復するより前の1963年、母が韓国政府から文化勲章を受けました。母は私に「これは韓国が日本と仲良くしたいというメッセージなんだ」と言いました。

その母が68年に亡くなりました。市民葬が開かれ、3万人以上が冥福を祈ってくれました。韓国の新聞は「木浦が泣いた」と書いた。その時、なぜ、国会議員でもない貧しい日本人女性に市民葬を開いてくれるのかと思いました。

木浦市民は、国籍よりも地域社会の一員が優先される社会があることを私に教えてくれました。私が日本で在日コリアンを大事にしてくださいと訴える精神的な強さを与えてくれたのが、この市民葬だったのかなと思っています。

私は在日コリアンのことをよく知りませんでしたが、来日すると、孤独死が相次いでいることが報道されました。在日は歴史を背負って生きています。その方が日本で誇りを持って生きていける社会が作れないのが大きな課題でした。植民地時代にたくさん問題はあったが、大きな問題のひとつは韓国人の文化を大事にしなかったところにあったのではないかと思いました。

私の妻は日本人。夫婦の考え方もモノの運び方もまるで違う。「故郷の家」では日本がいいとも韓国がいいとも言わない。お互い違うということを認めるのが国際化だと言っています。

故郷の家に、韓国に近い住環境をとオンドル部屋をつくりました。「なぜ畳の部屋がないの」。お年寄りから尋ねられました。ハラボジ（おじいさん）、ハルモニ（おばあさん）はキムチ、チゲ、プルコギも好きですが、うどん、天ぷら、刺し身も好き。二つの文化がなければ満足できないのです。私がお年寄りから学んだのは文化でした。

先日、韓国で法務局に寄ると、「外国人と共に発展する大韓民国」という大きな垂れ幕がありました。異文化を受け入れて伸びようとする考えがうかがえました。

日本で在日コリアンの施設をつくる運動を始めたとき、多くの市民が参加してくれました。堺市にできた故郷の家こそ、「市民福祉」のモデルだといえます。

いろんなことがありました。しかし、私は可能性を見つけているんです。日本には思いやりという文化がある。思いやりを周りから周りに、世界に広げていけば、市民レベルの国際貢献はできるのではないかと思います。平和に向けて発信する市民になることを誓って話を終わります。

「故郷の家・京都」で入所者らとすごす田内基さん(右)＝京都市南区、荒元忠彦撮影

大賞・田内基さん(68)

父は韓国人でキリスト教伝道師の尹致浩さん、母は日本人の田内千鶴子さん。出身地は韓国南西部の木浦。父は1928年、孤児院「木浦共生園」をつくったが、朝鮮戦争で行方不明に。68年、母から後を継いで園長に就任した。82年に生活の拠点を日本に移し、在日コリアン向けの施設をつくる運動を始めた。89年に堺市に特別養護老人ホーム「故郷の家」を開設。その後も大阪、神戸、京都市に同様の施設を開いた。大阪府和泉市在住。千鶴子さんは「韓国孤児のオモニ(お母さん)」と呼ばれ、95年には、モデルにした日韓合作映画が製作され、石田えりさんが演じた。

奨励賞・長瀬アガリンさん(47)

医療支援のボランティアだった長瀬理英さんと結婚し、1996年に来日。在日フィリピン人女性の生活支援を始め、98年、NGO「KAFIN」(埼玉県蕨市)を設立した。群馬、東京、神奈川、長野、愛知、大阪にも支部を置く。埼玉県飯能市在住。

同・「アフガン孤児支援ラーラ会」

2003年設立。柄子真弓さん(65)が代表で奈良県生駒市に事務局を置く。会員は約520の個人・団体。主にアフガニスタン西部のヘラートで孤児支援などに取り組む。「ラーラ」はアフガニスタン国花のチューリップを意味する現地語。

自由都市・堺 平和貢献賞

中世に海外交易で発展した歴史をもつ堺市が、2006年の政令指定都市への移行を機に「都市の繁栄には平和が欠かせない」と創設した。08年の第１回大賞は、スリランカで非暴力による和平活動に取り組むＮＧＯ「スリランカ国民平和評議会」専務理事のジハン・ペレラ氏。隔年で選考する。選考委員長は上田正昭・京都大名誉教授、選考委員は明石康・元国連事務次長、川島慶雄・大阪大名誉教授、千玄室・裏千家前家元、多谷千香子・法政大教授。

来日の比女性 危険から守る

「KAFIN」代表 長瀬アガリンさん

家族を支えるため、貧困や紛争から逃れるため、多くのフィリピン人女性がやむを得ずに日本に移住し、働いています。しかし、来日するまで危険性を知らされないこともあります。歌手やダンサーの仕事を約束したのに、酒場でホステスをさせられる女性がいます。日本人男性と結婚しても不幸な関係になる場合があります。ドメスティック・バイオレンス（DV）、売春、強制労働などの被害を受けることもあります。

KAFINは弱い立場の移住者を保護してきました。各地のフィリピン人コミュニティーに力をつけて自立してもらい、移住者や家族の権利を主張できるようにするのが主な活動です。

日本、フィリピン両政府はこうした人々の権利を保護する責任を果たすべきです。私は、堺市が平和と人権を尊重するまちづくり条例を制定したことに感銘を受けました。

私の原点は、幼い時に紛争の被害者だったことにさかのぼります。私はフィリピン南部のミンダナオ島の紛争地域で生まれ育ちました。住民は生きるのに必死でした。ミンダナオ島ではまだ多くの人が避難所におり、毎年、古着や薬を集めて送っています。心は今も、島の仲間のもとにあります。

再建へ 人のぬくもりを共有

アフガン孤児支援ラーラ会

代表の柄子真弓さん

2001年、米国のビルがテロで崩れ落ち、米国がアフガニスタンを攻撃しました。「放っておけない」と感じ、行動しました。02年12月に初めて訪れたアフガンの光景は終戦直後の日本をほうふつとさせました。放置されているのは、親を失い、誰にも守ってもらえない孤児でした。

「見た者の責任」を果たそうと支援を始めました。友人や知人が「聞いた者の責任」と加わり、波紋のように活動は広がりました。

「40年間働いてためたお金です」と匿名で寄付したのは堺市の方でした。「子育て中で大きな寄付はできません」と孤児に贈る楽器の布袋づくりを引き受けた人もいました。会員のほとんどが主婦です。専門家でなくても力を合わせれば、ささやかでも平和につながる働きができる例になれたのではと思います。

現地の州政府に250人の孤児が暮らせる施設を贈りました。英語、パソコン教室を開き、教育支援も続けています。ピクニックなどで交流し、人のぬくもりを共有できるように努めています。

アフガン情勢は厳しく、国の再建は遠いように思えます。私たちはあきらめず、自分たちのできることを積み重ね、国際平和に貢献したいと思います。

竹山修身・堺市長 平和・人権の尊重 今後も発信

21世紀は平和と人権の世紀と期待されていますが、今なお、紛争や貧困、飢餓、感染症の蔓延、人権侵害など、多くの人々の命や尊厳が脅かされています。

堺は中世に日本で最も平和な都市と知られ、国内外の都市と交流し、自治都市として発展しました。茶室に入れば武器を置き、身分の上下もなく、相手をもてなす堺出身の千利休の「茶の湯」の精神は今も受け継がれています。

堺市はこうした歴史と文化を背景に、かけがえのない平和と人権の尊さを世界に発信し、地方自治体として貢献することを目的に「自由都市・堺　平和貢献賞」を創設しました。今回の受賞者は賞の理念を体現するにふさわしいと確信しています。今後も、平和と人権尊重の確立のため、地道に活動している人たちを応援します。

企画・制作 朝日新聞社広告局 広告特集

自由都市・堺　平和貢献賞　平和と人権の尊さを世界へ発信

堺市は、「自由都市・堺　平和貢献賞」（朝日新聞社後援）の第2回授賞式を10月28日サンスクエア堺で開催しました。大賞を受賞した社会福祉法人「こころの家族」理事長の田内基さんの記念講演をはじめ、当日の模様を要約してお届けします。

記念講演

大賞

「こころの家族」理事長

田内 基 さん

たうち・もとい●1942年、韓国の木浦出身。父は韓国人でキリスト教伝道師の尹致浩（ユン・チホ）さん、母は日本人の田内千鶴子さん。父は28年に孤児院「木浦共生園」をつくったが、朝鮮戦争で行方不明に。68年、園長に就任。82年に来日し、89年、在日韓国・朝鮮人向けの特別養護老人ホーム「故郷の家」を堺市に開設。その後も大阪、京都、神戸市に同様の施設を設置、運営している。大阪府和泉市在住。

思いやりの文化を世界に広げよう

私の両親は韓国の木浦で「木浦共生園」という孤児院を運営していました。私は寝るのも食べるのもすべて孤児と一緒、自分の子を特別扱いしてくれない母をずっと恨んで育ちました。社会福祉を学びたいと言うと、母は泣いて反対しました。「福祉の仕事は未完成事業のように終わりがないのだから」と。しかし、まだ母を嫌う気持ちもあり、福祉を学びました。その中で、私が幼いころ問題行動を起こしたのは、自分の中の「母の愛を独占したい」という気持ちの表れであったことに気づき、孤児たちの寂しさもわかるようになりました。

母は社会事業家ではなく、ごく普通の母親でした。共生園の子どもたちは事業の対象でなく愛情の対象でした。母が亡くなった時、市民葬が開かれ、3万人以上の人が冥福を祈ってくれました。木浦市民は、国籍より地域社会の一員を大切にする社会というものを教えてくれました。この市民葬は私に、在日コリアンをもっと大切にしてくださいと日本で力強く言える精神的強さをくれたと思います。

私の妻は日本人ですが、考え方も発想もモノの選び方も天と地ほどに違います。どちらがいいとは言わない。お互い違うことを認めるのが国際化だと思います。「故郷の家」の人たちはオンドル部屋とキムチ、チゲ、プルコギが好き。でも、うどん、刺し身、天ぷらも好きで、畳の部屋もほしい。二つの文化がなければ満足できないのです。私が「故郷の家」で在日コリアンのお年寄りから学んだのは文化でした。

日本人には思いやりという文化があります。これを自分の周りから世界に広げていけば、市民レベルの国際貢献はできるはず。愛をもつ心はみんなにあります。その可能性を信じ、世界平和に向けて発信する市民となることを誓いたいと思います。

フィリピン人女性の保護と自立をめざす

奨励賞

「KAFIN」代表

長瀬 アガリン さん

ながせ・アガリン●1963年生まれ。95年、医療支援のボランティアだった長瀬理英さんと結婚、96年に来日し、98年に在日フィリピン人の互助組織NGO「KAFIN」を設立。現在、東京、神奈川、愛知、大阪、群馬、長野に支部がある。埼玉県飯能市在住。

私はフィリピン南部、ミンダナオ島の紛争地域の出身です。ここでは、紛争の中で、皆生きるのに必死でした。家族を支えるため、また貧困や紛争の被害から逃れるために多くの女性が日本など他の地域へ移住し働いていますが、その中には虐待や搾取、売春、強制労働、ドメスティックバイオレンス（DV）などの被害を受けている人たちがいます。KAFINの主な活動は、弱い立場にいるフィリピン人移住者が地域で助け合い、自立できるよう、組織化とエンパワーメントを通じて、本人及びその家族の権利を主張できるように支援することです。

私の活動の原点は、生まれ育った紛争地域での、銃弾を避け、飢えをしのいだ経験です。私の心は今もなおミンダナオの仲間たちのもとにあります。

平和のために思いを一つに合わせて

奨励賞

アフガン孤児支援ラーラ会

代表 **綿子 真弓 さん**

アフガン孤児支援ラーラ会●2003年設立。奈良県生駒市に事務局を置くNGO。会員は約520の個人・団体。主にアフガニスタン西部のヘラートで孤児や寡婦の生活支援などに取り組んでいる。

ニューヨークのビルがテロ攻撃により崩れ落ち、米国がアフガニスタンを攻撃した映像を見て、私たちは、緊迫した危惧を抱くとともに、覚醒しました。2002年12月に初めてアフガニスタンで見た孤児の姿に、直感的に「助けなければ」と思いました。「見た者の責任」で孤児への支援活動を始めてすぐ、友人・知人たちが「聞いた者の責任」だと言って活動に加わり、こうしてラーラ会の活動は静かに確かに広がりました。

「小さなことでも、皆が自分のできることで協力する」がラーラ会のコンセプトです。アフガニスタンを取り巻く情勢は、ますます混迷を深めていますが、私たちはあきらめません。自分たちのできることを積み重ねて国際平和に貢献したいと思います。

自由都市・堺 平和貢献賞

堺市が、2006年の政令指定都市移行を契機に創設。アジア・太平洋地域で平和貢献活動に取り組む個人や団体を隔年に表彰する。08年の第1回大賞は、スリランカで平和構築活動に取り組むジハン・ペレラ氏、奨励賞は医師の吉岡秀人氏、NPO日本ネパール女性教育協会が受賞。選考委員長は、上田正昭・京都大名誉教授、選考委員は、明石康・元国連事務次長、川島慶雄・大阪大名誉教授、千玄室・裏千家前家元、多谷千香子・法政大教授。

あいさつ　自由と自治の精神を受け継ぎ平和社会の実現に貢献

竹山 修身 堺市長

21世紀は平和と人権の世紀と期待されていますが、今なお、世界では紛争や貧困、飢餓、感染症の蔓延（まんえん）、人権侵害などにより多くの人々の命や尊厳が脅かされています。

堺は、中世には、日本で最も平和な都市として知られ、国内外の都市と交流し、自治都市として発展しました。

堺市では、自由と自治の精神を受け継いできた歴史と伝統を背景に、堺から世界へ、かけがえのない平和と人権の尊さを発信することを目的に「自由都市・堺　平和貢献賞」を創設しました。この賞を通じ、平和と人権尊重の確立のため地道に活動されている方々を応援することで平和社会の実現に貢献したいと思います。

堺市 SAKAI CITY
〒590－0078 堺市堺区南瓦町3番1号
℡072－228－7159 堺市市民人権局人権部人権企画課

［自由都市・堺 平和貢献賞ホームページ］
http://www.city.sakai.lg.jp/city/info/_jinkenbu/heiwa_index.html